

# まきむく

纏向  
考古学通信  
Vol.17  
2023.10



▲纏向遺跡 汗地区建物群の柱跡の仮整備直後（2018年）

特集 |

## 見てわかる!! 纏向遺跡をめざして

令和4年度まきむくレポート

発掘された纏向遺跡R4

纏向幻想—卑弥呼に会いに行く(4)—

まきむく裏物語：似ている？似ていない？！3つの木製仮面

# 見てわかる○○ 纏向遺跡をめざして

皆さん、遺跡公園にはどんなイメージを持ちますか？看板はあっても、一面が野原でわかりにくい等の言葉をよく聞きます。

右の写真からは何を想像するでしょうか。纏向遺跡に携わる私たちは、大きな建物があった事を想像しますが、伝わっているでしょうか？実際に復元して建てることができれば、伝わりやすいと思います。しかし、建物を全て復元するためには、様々な壁が存在します。例えば建築費や管理するコストが膨大なこと、また、確定的な復元案を作成するには材料が乏しく、研究の進展により復元案に変更が加えられる可能性もあります。



完全再現が困難な遺跡の復元。それでも人々に伝えたい発掘や研究の成果をどのように伝えるのか、大きな課題です。

そこで建物をCGで再現し、ARやVRといった最先端の技術を利用して、スマートデバイスに映し出された現地の風景に建物をたてる仕組みを作ることにしました。纏向遺跡の大型建物がよりわかりやすく見えるようになりましたので、ぜひダウンロードして現地でお楽しみください！

## YAMATO 桜井周遊 AR ガイドの楽しみかた

アプリをダウンロード！

アプリを起動させたら言語を選択

マップの「纏向遺跡」を選択

このアイコンだよ！



App Store  
からダウンロード



Google Play  
で手に入れよう

スマートフォンを横に  
に向けて使ってね！



纏向遺跡ボタンをタップ！

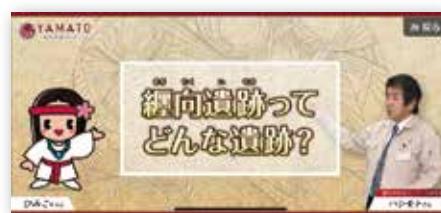


纏向遺跡  
纏向遺跡ボタンをタップ！

3つのポイントで音声解説やARを体験しよう！

このポイントマーカーが目印！

各ポイントで遺跡  
の音声解説を聞く  
ことができます。



マーカーを  
読みませて…

建物出現！



解説は研究員とひみこちゃんの会話形式で、  
わかりやすい説明を目指しています！  
この説明はご自宅でも聞くことができるの  
で、予習復習に便利♪

建物のAR画像は現地にあるマーカーを読み込むと見ることができます。  
ぜひ遺跡へお越しください！

今後も桜井市にある多くの貴重な文化財を、このアプリに載せていくたいと考えています。

令和5年度には「山田寺跡」の完成、「箸墓古墳」「藤原京」を追加する予定です。乞うご期待！

## 纏向学セミナー

年に2回、纏向学に関するテーマにて、お招きした研究者に講演いただき、その後当センターの寺沢薫所長と対談いただく企画です。

2022年7月16日に山田浩之先生（大神神社）を招き、第16回「三輪山という場所の必然－古代三輪山祭祀の祖型と展開－」と題し、2023年1月21日には井上



▲第16回：山田氏と所長の対談

主税氏（関西大学）を招き、第17回「卑弥呼共立の頃の朝鮮半島諸勢力の動向を考える」と題して開催しました。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、規模を縮小しての開催となりましたが、2回で計約220名の方にお越しいただき、各講演、対談ともに熱心に耳を傾けておられました。



▲第17回：井上氏と所長の対談

## 纏向学研究センター設立10周年記念 東京フォーラムIX 「纏向学」発信! 卑弥呼共立



▲東京フォーラムのシンポジウムのようす

## 纏向考古楽講座

2022年12月3日、今年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から纏向遺跡を歩く形で開催し、16名の参加がございました。今回は、「纏向遺跡の際を歩いて極めよう」とテーマを設定しました。奈良県遺跡地図をもとに纏向遺跡の東端から南端を目指して、珠城山古墳群、纏向日代宮跡伝承地や大兵主神社へ向かい、その後慶運寺、ホケノ山古墳、稻荷山古墳等などを訪れました。

2022年10月16日に東京都千代田区有楽町のよみうりホールにて、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点より、短縮しての開催でしたが、約300名の方々にご来場いただきました。

寺沢所長による基調講演「卑弥呼共立」事情のあと、関口和哉氏（読売新聞社権原支局長）の司会のもと、苅谷俊介氏（日本考古学協会会員）、櫛宣田佳男氏（大阪府立弥生文化博物館館長）、渡邊義浩氏（早稲田大学文学学術院教授）と寺沢所長も参加してのシンポジウムでは、卑弥呼が立った時代背景や経緯など活発な議論が展開されました。



▼考古楽講座で解説する所員

# 発掘された纏向遺跡 R4

## 纏向遺跡第203次調査

期間：2023年1月6日～1月23日

面積：152m<sup>2</sup>



▲第1トレンチ（東から）



▲第2トレンチ（南東から）

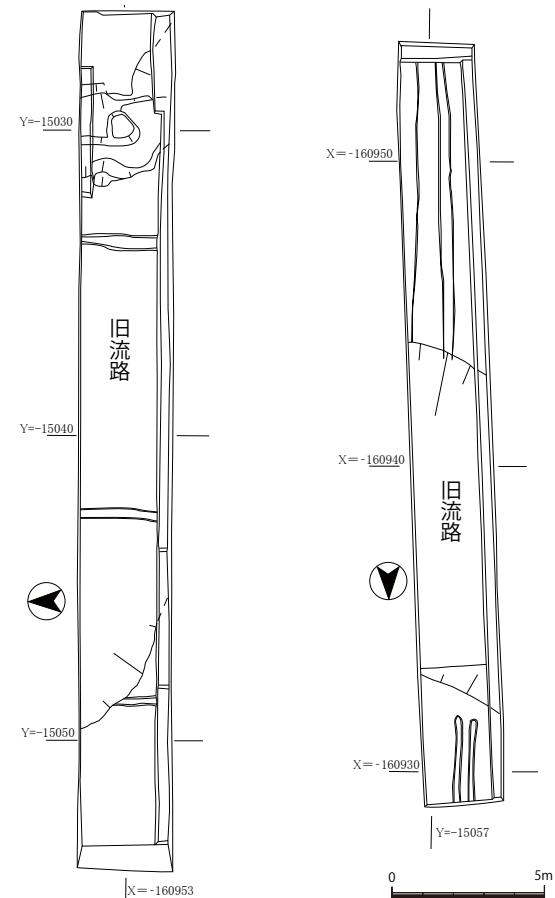
桜井市の北西部にある纏向遺跡は、東西2km、南北1.5kmと広く、3世紀から4世紀にかけて栄えた集落です。大和以外の地域から運ばれた土器が多いことや、纏向石塚古墳や箸墓古墳といった最も古い時期の古墳が存在することから、注目を集めてきた遺跡です。

調査は天理市境に近い位置、県道田原本桜井線沿いでおこないました。調査地はこれまでの発掘調査から南東・北西方向に流れる纏向川旧流路（纏向川河道1）の南岸にあたることが想定されました。そこで、まず試掘調査をおこなったのち、纏向川河道1を外して本調査をおこないました。

調査区は東西方向の第1トレンチ（幅約3.0m、長さ約28.0m）と、南北の第2トレンチ（幅約2.6m、長さ約25.0m）を設けました。



▲太田地形図 (S=1/5000)



▲第1トレンチ（左）・第2トレンチ（右）平面図  
(S=1/250)

調査の結果、南北方向の溝（幅約2.4m、時期不明）と、細い旧流路を検出しました。旧流路は纏向川河道1と並行する別個の流路と考えられます。幅約11m前後で、緩やかにカーブしながら南東・北西方向に続きます。埋没時期は出土した長頸壺から弥生時代後期後半以降と考えられます。他に柱穴や土坑は検出しませんでした。近接の第73次調査でも同時期の遺構・遺物が出土しており、河道1が流れる周辺には纏向遺跡出現前の遺構が残っている可能性がうかがえます。

遺構は少なかったものの、纏向川河道1南岸の位置が明確になり、並行する流路が検出されたことで、纏向遺跡の地形を考えるうえで重要な成果を上げることができました。

（森暢郎）

## 纏向遺跡第204次調査

調査期間：2023年2月28日～3月31日

調査面積：約108m<sup>2</sup>

今回の調査は纏向遺跡の中でも遺構の密度が高い太田微高地の西側でおこないました。太田微高地は東側が墓域、西側が居住域として利用されており、生活と祭祀が密接な関係にあったと考えられています。

調査の結果、溝、多数の土坑や柱穴を検出しています。土坑は直径約1.9m、検出面から深さ約1.3mをはかる平面円形で、断面が漏斗状になるものを検出しています。時期は調査中ですが、布留式期以前と考えられます。

柱穴は東西に3つ並び、西端の柱穴から更に北に続く一群を検出しています。これらは調査区外の北に続

く掘立柱建物の南辺になると考えられ、切り合い関係から前述の土坑よりも新しいものになります。平面は隅丸長方形になり、長辺が真北に対して西に約20°傾いています。柱材もそれぞれ残っており、断面が蒲鉾状になり、曲面が柱穴の南側に向くように揃えられ、北寄りに立っています。

過去の調査では、居住域において遺構が斜めの方位になる例がいくつか確認されており、今回の調査でも土坑や建物に同様の特徴がみられます。太田微高地の居住域を探るうえでの新たな成果となりました。

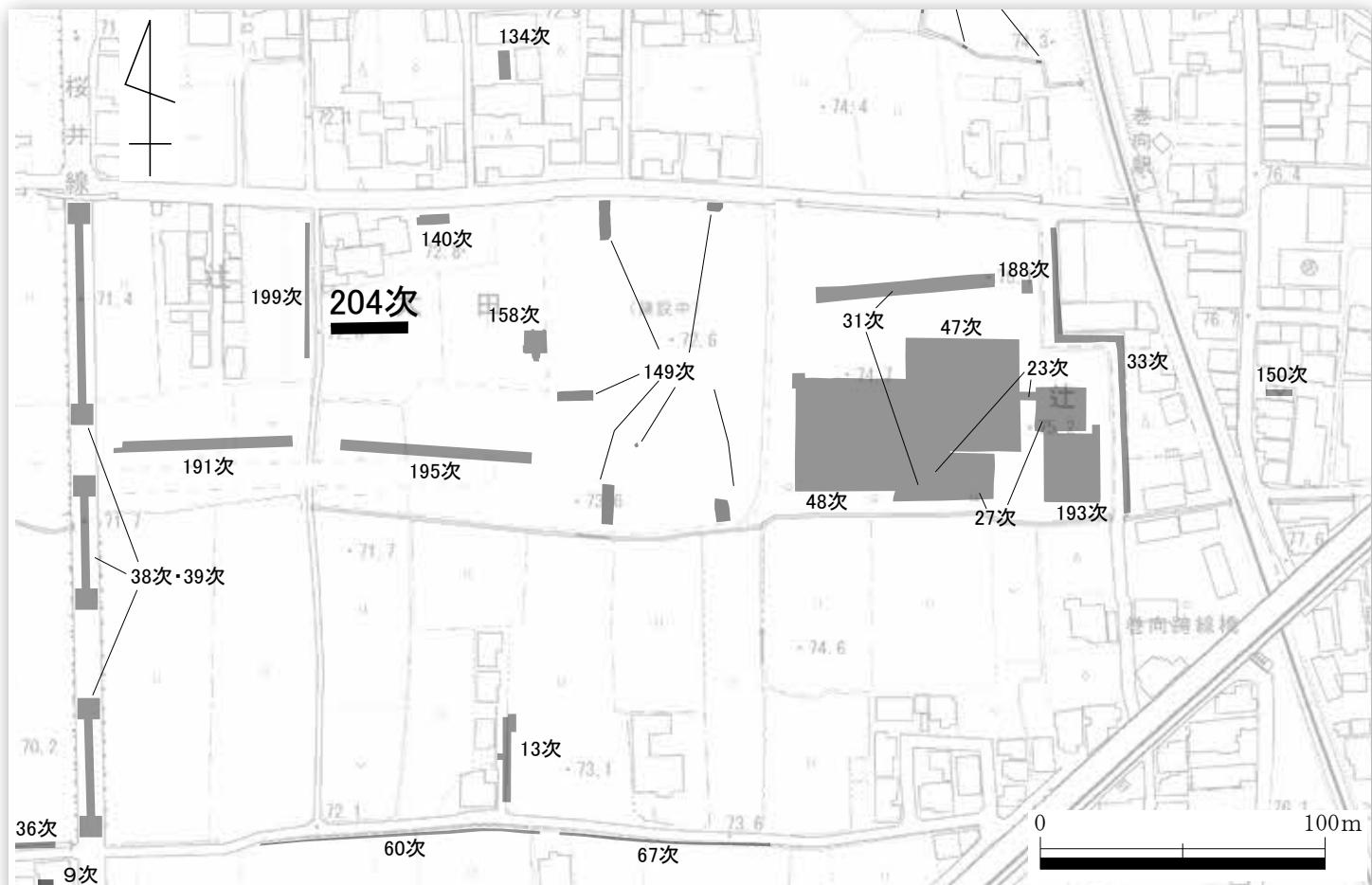
(巽優貴)



▲第204次調査区全景（西から）



▲柱穴検出状況（南東から）





『魏志倭人伝』に記された「倭国乱」。前回は、その国内外の事情を簡単に見てきた。タイムマシンの性能が悪いせいか、じつにざっくりとした状況しか見えてこない。

そこで今回は目線を大陸に向けて、この2世紀末の混沌と閉塞感のなかにあって先取の気質に満ちた二つのエピソードに目を向けてみよう。



1961年も暮れる頃、天理市櫟本町の古くは「東大寺領櫟本庄」にあった山の頂上で、全長約130mの前方後円墳の発掘が進められていた。竹林造成時の盗掘が発覚したもので、天理大学の調査団は後円部に設けられた粘土槨のなかから発見された大量の副葬品に遭遇していた。

粘土郭の両側には素環頭鉄刀7振、木製把頭鉄刀7振、青銅製の把頭飾を装着した鉄刀5振があり、そのなかの1振に金で象嵌した文字があることが発見され大きな話題となった。

保存処理のためにていねいに鏽落としが進められるなか、金で象嵌した文字が浮かび上がってきた。あたかも東大寺山古墳に葬られた王が、1700年の時を超えて自らの王族の業



▲東大寺山古墳の「中平年」銘鉄刀

績と真実を語り始めたように。

刻まれた文字は24字。さびて読めない字もあるが、次のように判読された。「中平□年 五月丙午 造作文刀 百練清鋤(鋤) 上應星宿 下辟不祥」。その意味は、「(この鉄刀は) 中平□年の五月丙午の日によく製鍊した優れた鉄から造ったすばらしい刀である。(この刀を持つと) 天上の星宿の運行に照応し、地上の不足の災いを避けることができる」というものだ。

「中平」とは後漢靈帝の180年代後半の年号だから、東大寺山古墳が造られた4世紀中頃までには160年もの開きがある。どうしたことか。

「中平年」銘鉄刀は青銅製環頭を付けた5振のうちの1振である。残りの鉄刀もすべて、中国からもたらされたときは素環頭の鉄刀であったものを、日本で柄頭だけを付け替えている。「中平年」銘鉄刀の環頭は、三葉の周りに花弁と鳥首形の飾りを付いている。

なかには佐味田宝塚古墳の家屋文鏡と同じモチーフの家を描いた環頭もあるから、付け替え時期は4世紀中頃をそう古くには遡りそうもない。つまり、鉄刀が作られた180年代後半以降に倭国にもたらされ、東大寺山古墳の被葬者の手に渡った4世紀の前半頃に付け替えられたのだろう。



「中平年」銘鉄刀は2世紀末に後漢王朝に朝貢した王（イト国王、邪馬台国王など諸説）が下賜されたと考える人が多い。しかしこの時期、後漢王朝への道は幾重にも閉ざされていた。190年には洛陽は焼亡し事実上王朝は崩壊していた。

発掘調査に関わった金閔恕さんは東大寺山古墳の位置からして、朝貢の主は邪馬台國女王卑弥呼でその相手は公孫度だと考えた。鋭い指摘だが、卑弥呼共立と公孫氏への朝貢を3世紀初めの事件だと考える私には少し違ったストーリーが浮かぶ。

そもそもこの鉄刀は、遼東の太守であった公孫度が靈帝から下賜されたか支配地域から献上されたものだったのではないか。公孫度は獻帝を擁して霸権を掌握した曹操から武威將軍と永寧郷侯を冊封されたとき、「我は遼東の王である。なにが永寧郷侯ごときか」と言って印綬を武庫に放り込んでしまった。投げ捨てることもなく、しまい込んだ度の行動には「いつか切り札に使えるだろう」といった権力欲に満ちた強な心根が伝わってくる。「中平年」銘鉄刀もそのなかで切り札となる日を待っていたのである。

204年頃、勢力を拡大して帶方郡を設置した子の康にもその血は流れていた。ついにその刀を有効利用するときがやってきた。新たな倭國の大王として朝貢してきた卑弥呼に対してこの刀は高度な下賜品の一つとして有効利用されたのだ。

東大寺山古墳の被葬者は、そのときの遣使代表だった人物の末裔だったのだ。卑弥呼はその労をねぎらって刀を下賜した。纏向政権を支え続けてきた側近から数代続いた刀の伝世も、政権交代によって新たな政権を担う側近へと立場を変えたとき、柄頭はいかにも和風の環頭へとリニューアルされた。

「中平年」銘鉄刀は、王権誕生事情やその業績と権威を語る道具としてはもはや過去の遺産となった。その刀は東大寺山古墳の王の死とともに、漸う深い眠りにつく機を得たのであった。

もう一つのエピソードは、はるか中国の安徽省毫県元宝坑村に飛ぶ。1977年、その1号墓で2世紀後半頃の壇室墓が発掘された。これといった副葬品はなかったが、墓室を構成する壇の裏面に籠で書かれた多数の文字が注意を引いた。

その数は164。墓主の一族に関わる「故穎川太守曹褒」「故長水校尉曹熾」の名や、「倉天乃死」といった黄巾の乱のスローガンに通じるような文言は、副葬品以上にこの時期の社会風潮や世相を知る上での貴重な資料として注目された。

曹氏の故地でもあるこの墓の主には、曹熾の弟「曹胤」が候補に挙げられたが、そのなかで今、「倭人壇」と呼ばれる一つの文字壇が注目を浴びている。



▲元宝坑1号墓出土74号字碑（倭人碑）の文字の輪郭

壇に書かれた文字は7文字で「有倭人以時盟不(否)」と書かれていた。この倭の文字を「倭」(あるいは「倭」に通じる「倭」)と読むか、「倭(倭)」と読むかの議論となつたが、最終的に「倭(倭)人」で落ち着いた。

「倭人壇」は、「不」の文字が端ぎりぎりに書かれている。その読みは、「倭人有り。時を以て盟することなきや」であろう。さらにその後には答えが書かれていたのではないか。

私は、「有倭人」の文字と「以時盟不」の文字のあまりにも違った筆致の差に注目する。「有倭人」はじつにのびのびとした躍動感のある書き慣れた筆致だ。それに比べて「以時盟不」はこじんまりとまとまっていて勢いがない。書き慣れていないのだ。

元宝坑村では曹氏一族の胤の墓づくりが進められていた。昼の休憩の合間、造墓主任がやって来て人夫たちの世間話に加わる。南の吳の動勢、西の蜀の趨勢が真っ先に話題となる。

そして、話が次第に海北の公孫のこと、さらに東の滅や扶余のこと、樂浪や韓のことにおよぶなか、造墓主任が近くで乾かしていた壇に「有倭人」と自信満々に書き上げて人夫たちに渡す。壇はたらい回しとなり識字に定評のある一人の人夫が指名される。さっそく辿々しい字が刻まれていく。

「その時が来たら、倭人ははたして盟約を結ぶことはないのだろうか」。その相手が自分たち魏なのか、それとも吳や公孫なのか。それは世間話の行き着いた先のみぞ知るである。そして彼は、その壇を識者である造墓主任に托し答えを期待したのかもしれない。

はたして、造墓主任の答えはあったのか、それとも人夫たちの懸念を書き記することで事足りたのか。もはやタイムマシンから問いただす術はない。

2世紀の終わり頃、魏の太祖曹操の故地でも、東アジアの勢力版図と國際情勢を占う尊が世間を席巻していた。帝国末期の世に生きる彼らもまた、これから日々の暮らしをうらう新たな政治情勢の到来に不安を感じていたのである。

外の世界の動きに絡めた二つのエピソードは、「倭国乱」の頃の海の彼方の地で「倭人」や「倭国」がどのように位置づけられていたかを、支配者レヴェルと民衆レヴェルで知ることのできる重要なデータである。

外の世界の不安と閉塞感に満ちた世相は、当然ながらこの国でも共有された。そんな時代、卑弥呼共立はどのようにして実現されたのか、次回は、タイムマシンのタイムスケールを精一杯細かく調整して覗いてみることにしよう。

(つづく)

#### 【図の出典】

- ・東京国立博物館・九州国立博物館編 2008『重要文化財東大寺山古墳出土金象嵌銘花形飾環頭大刀』同成社
- ・森浩一 1984『曹氏墓出土の倭人字碑と二、三の問題—李燦氏の業績を中心に』『文化学年報』第33輯 同志社大学文化学会

## 似ている？似ていない？！3つの木製仮面

まきむく裏物語

2023年5月に大阪府東大阪市の西岩田遺跡で木製仮面が出土したニュースが発表されました。弥生から古墳時代にかけての木製仮面の例としては国内3例目でした。

実は、他2例は桜井市から出土しています。一つは纏向遺跡第149次調査で出土したもので、県指定の文化財にもなっている知る人ぞ知る木製仮面。もう一つは、纏向遺跡から南へ3kmにある大福遺跡第28次調査から出土しているものです。こちらは半分しか残っておらず、仮面状木製品と少し謙虚な名前がついていますが、目の部分の仕上げなどが纏向遺跡のものと似ているので、仮面の可能性が非常に高いといわれています。纏向遺跡のものからは若干古いもので、厳密にいえばこちらが最古の木製仮面といえます。

桜井市の2例と東大阪市の1例の木製仮面は、写真にあるように厚さや材質が違い似ていないところもありますが、目の仕上げ方は3例とも共通しており、なにか雰囲気が似ているところもあります。3つの木製仮面は、祭祀で使用されていたものと考えられていますが、同じ目的の祭祀でつかわれたのか、はたまた出土した集落同士になにかつながりがあったのか、興味は尽きません。もっと出土例が増えて比較検討できるようになればいいですね。

(丹羽恵二)

▶大福遺跡出土仮面状木製品



▶纏向遺跡出土木製仮面



▶西岩田遺跡出土木製仮面  
(公益財団法人大阪府文化財センター提供)



## 東京フォーラムX開催のお知らせ

桜井市の魅力や纏向遺跡、纏向学の研究などの発信を目的とした東京フォーラムが10回目を迎えます。「前方後円墳創生－纏向遺跡と古墳時代の始まり－」をテーマに、講演とシンポジウムを開催します。

### 【講演者】

佐々木憲一（明治大学教授）、苅谷俊介（京都橘大学客員教授）、辰巳和弘（古代学研究者）、橋本輝彦（纏向学研究センター統括研究員）

### 【シンポジウムコーディネーター】

寺沢薰（纏向学研究センター所長）

敬称略

申込み方法など、詳しくは当市ホームページをご覧ください。

桜井市ホームページ  
(観光まちづくり課)

<http://www.city.sakurai.lg.jp/sosiki/machidukuribu/kankouka/event/6763.html>



## 展示収蔵室からのお知らせ from 桜井市立埋蔵文化財センター

桜井市立埋蔵文化財センターでは、2023年10月4日（水）から『令和5年度特別展 古墳時代研究 陰の立役者 円筒埴輪－桜井市出土資料を中心に－』を開催します。  
詳しくは、下記ホームページをご覧ください。

### ▶桜井市ホームページ（埋蔵文化財センター）

[https://www.city.sakurai.lg.jp/sosiki/kyouikuiinkajii\\_mukyoku/maizoubunkacenter/maibun.html](https://www.city.sakurai.lg.jp/sosiki/kyouikuiinkajii_mukyoku/maizoubunkacenter/maibun.html)



開館 9:00 ~ 16:30

（入室は16:00まで）

閉室日 毎週月・火曜日、および

祝日の翌日

入室料 一般200円（団体20名以上で150円）

（市内在住の方・中学生以下の方は無料）

所在地 奈良県桜井市芝58-2

問合せ 桜井市教育委員会事務局 文化財課

TEL 0744-42-6005

## 編集後記

桜井市内の2つの木製仮面をそれぞれ発掘した2人の調査員は同じ年で、ひげと眼鏡が共通していますが、顔はよく見ると違います。似ているようで似ていない、似ていないようで似ている不思議な繋がりを感じます。

担当：立石千絃

## 纏向考古学通信Vol.17

発行・編集 桜井市纏向学研究センター

発行年月日 2023(令和5)年10月30日

所 在 地 〒633-0001 奈良県桜井市三輪686  
芝運動公園内

TEL/FAX 0744-45-0590

\*纏向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を活用して作成し、ご寄附いただいた方に配付しています。